

北
大

峰



3月号

第5卷 第3号

通卷 第34号

巻頭の言葉

菩薩道の実践なくして ······

自我偈講義△久遠の本仏と人間釈尊▽第十三回

仏舍利供養の贊否について ······ 日高白象

立正安國と王仏冥合△第四回▽

本門の戒壇と戒壇本尊 ······ 日高白象

信仰相談室

あやまてる創価学会の折伏と戒壇について ······ 日高白象

日蓮大聖人御尊像の頒布	34	第五回法華經講鑑の集い	36
驚峰誌代通算のお通知	35	賛助会費志納者御芳名	36
三種郵便物になれば	35	編集後記	37

表紙題字・身延山法主藤井日静猊下
表紙写真・インド靈鷲山へ渡つた身延山金剛の釈尊像

実践なくして

法華經は「教菩薩法、仏所護念の妙法華經」といわれているように、久遠本仏の護念する本化の菩薩道を教示した聖典です。従つてこの菩薩道の実践なくしては法華經信仰はありえないと申せましょう。通常、法華經信仰は罪障消滅、仏果菩提を成すためのものとされ、それを目的として目的地へ道を急ぐあまり、加持祈禱や読経回向ばかりに頼り切つて、肝心なみずから菩薩道の実践をおろそかにしたり失念し勝ちなものです。いな寧ろ大抵の人々が殆どそれに墮ち入つてゐる状態です。これは全く本末顛倒であつて、実は減罪にしても成仏にしても、この本化の菩薩道を実践した結果、その功德として成就されるものなのです。国家的立場における立正安国にしても、安國のための立正ではなく、また加持祈禱のみによつて実現されるものでもなく、實に、この菩薩道の実践を通して、その功德として成就されるのです。日蓮大聖人が觀心本尊鈔に、

「釈尊の因行果徳の二法は妙法蓮華經の五字に具足す。我等この五字を受持すれば、自然に彼の因果の功德を譲り与え給う。四大声聞の領解に曰く、無上の法珠、求めざるにおのずから得、云々」と指南されていることこそ、まさしく此の間の消息を物語る何も

菩薩道の

のでもありません。お題目を受持する菩薩道の実践、それが法華經信仰のすべてなのです。

ところで本化の菩薩道とは具体的に如何なるものであるかといえ
ば、大聖人がみずから実践された法華經第二十章における常不輕菩
薩の人間礼拝、但行礼拝にほかなりません。自分を計算に入れず、
善も惡も、敵も味方も、一紙半錢、草木瓦礫にいたるまで、生きと
し生ける、ありとあらゆる、すべてのものゝ価値を尊び敬い、お
題目を以つて合掌礼拝する、そこに菩薩道の根本があります。上は
仏界から下は地獄界に至るまで、幽現の二境に亘つて礼拝して御覧
なさい。家族に対し友人に對し、そして一茎の花に對してまでも礼
拝を実行して御覧なさい。きつと大いなる仏道の尊さが、しみく
と身に感ぜられることでしよう。若し敵する者があるならば、敵を
憎まず却つて礼拝して御覧なさい。道はそこから開けて来るはずで
す。常不輕菩薩は此の実践を通して仏陀釈尊となり、大聖人も此の
実践を通して上行菩薩再誕の自覺に達しています。私達たちもまた
まことに本化の菩薩道なくして法華經信仰はありえないのです。

久遠の本仏と人間釈尊 ▲第十三回▽

仏舍利供養の贊否について

日 高 白 象



23

ここで一言ふれておかねばならないことは、今日、
日蓮門下の中における仏舍利供養に対する贊否の問題
です。

もとより仏舍利供養は、仏滅後インドにおいて盛ん
に行われ、阿育王朝においては八万四千の仏舍利塔が
建立されたといわれています。その後、大乗仏教が興
起して、仏舍利供養よりも經書供養の方が鼓吹されま



奈良法隆寺の五重の塔

したが、然し、それでも現実には仏舍利尊崇の流れは断つことが出来ず、中國における由緒ある寺院にしても、日本における初期の寺院にても、仏舍利塔を中心として、これを取り囲むようにして堂塔伽藍が建立されており、奈良の法隆寺、大阪の四天王寺は、その最もよき例を今日に留めています。

法隆寺・四天王寺の仏舍利塔は、申すまでもなく五重の塔であり、戰前までの日本仏教における仏舍利塔は、殆ど五重の塔という建築様式で建立されて来ました。ところが後世、何時しか五重の塔は、仏舍利を祭るということよりも、その建築美が重んぜられるようになり、建築位置も境内の中心部より一隅に移され、単なる輪廓の美を添える建物にすぎなくなつてしましました。

日蓮宗大本山池上本門寺にても、五重の塔は墓地の中にあり、寺院の中心は祖師堂となつています。總本山身延の久遠寺にしても堂塔の中心は同じじく祖師堂

であり、五重の塔は、曾つて奥の院の参道の脇に建てられていたのですが、明治八年の大火に焼失し、今そこの跡には、国柱会の納骨堂が建てられている始末です。日蓮宗に限らず日本仏教各宗寺院の中心は殆ど祖師堂であり、釈尊を祭る堂塔は、添えものの状態であるか、さもなければ無視されている有様です。仏像にしても釈尊像よりも祖師像の大きいのが一般であり、こゝに信仰の顛倒があります。

こうした中にあつて身延山法主藤井日静猊下には、目下建築中の身延山大学が完成した後、周囲の日本建築との調和を考え、五重の塔の建築様式で仏舍利塔を現在の祖師堂の上方の山を切り開いて建立することが発願されているように漏れうけたまわっていますが若しこれが実現するならば、身延山が久遠実成の本仏釈尊を本尊とする寺である故に久遠寺と名命されていいる寺号からしても、誠に結構なことであり、出来れば上ノ山の丈六の釈尊像を安置するという、總本山にふ

さわしい氣宇広大なる五重の塔を建立してもらいたい
と思うほどです。

ところで戦後、日本全国各地に建立されている仏舎利塔は、ビルマ人による仏舎利塔にしても、読売新聞

社の主催する東京多摩丘陵における読売ランドの仏舎利塔にしても、殆どバゴダ式仏舎利塔であり、戦後建立されている一連の仏舎利塔の主勢をなすものは、日本山妙法寺一門による仏舎利塔であることは申すまで
もありません。

日本山の仏舎利は、インド及びセイロンより日本山々主藤井日達猊下によつてもさだられたものですが、現在日本山一門においては、日本全国に百基の仏舎利塔と、駅尊みずから本仏として法華經を説法されたインドの靈鷲山における仏舎利塔と、日印両国にわたつて銳意建設が推進されています。これはまさしく仏滅後未曾有とも謂るべき一大仏事でありますよう。

就中、今より三年後の一九六九年、マハトマ・ガン

デー翁の生誕百年祭を記念するインドの国慶を前にして、まさに完成しようとしている靈鷲山の仏舎利塔こそは、弘安五年十月七日の波木井殿御書に（偽書ではあります）

釈迦仏は天竺の靈山に居して八ヶ年法華經を説かせ給う。御入滅は靈山よりウシトラに当れる東天竺クシナ城、跋提河の純陀が家に居して入滅なりしかども、八ヶ年法華經を説かせ給う山なればとて、御墓をば靈山に建てさせ給いき。

されば日蓮もかくの如く、身延山よりウシトラに当りて武藏ノ国、池上右衛門ノ大夫宗長が家にして死すべく候か。

たとえ、いすくにて死に候とも、九ヶ年の間、心安く法華經を説誦し奉り候山なれば、墓をば身延山に立てさせ給え。未來際までも心は身延山に住むべく候。

と述べられている「靈山のお墓」——即ちそれは釈

尊人滅滅後、八等分にされた仏舍利の一部を、マガダ國の阿闍世大王が、領内の釈尊ゆかりの聖地である靈鷲山の山頂に奉安すべく建立された仏舍利塔のことであり、後世インド仏教の滅滅と共に跡形もなくなつてしまつたものを、今こそ本門法華經の立場で開会再現し、靈山虛空会上における釈尊常說法の昔を彷彿せしめ、四海婦妙、通一仏土の源泉たらしめんとするものです。

この仏事は、インド国内における異教徒の力もありず、日本国内各宗の援助も頼まず、日本山たゞ一門の擊鼓宣令と、但行礼持の実践によつて遂行されているのですが、周知の通り、先年、この仏舍利塔の正面本尊として、身延山古來の金銅の釈尊像（本誌表紙の写真の原物）一軀が、身延山よりインド政府に寄贈せられて、既に現地へ渡り、王舎城外の竹林精舍趾に仮安置されており、また日蓮大聖人が御使用された注法華經（宗宝・春日版・心性本の法華經）の写真影本八巻

もまた、鞍馬寺の納経筒（国宝）に準ずる宝塔におさめられ、これも身延山の名のもとに、この仏舍利塔の胎内に安置されるべく、日下、全宗門の啓蒙を兼ねて浄財が勧募され、着々渡印の準備がすゝめられています。仏法僧の三宝の中、既に身延山より釈尊像が渡り、次に法華經が渡ろうとしておるならば、必然、宗門有為の青年僧もまた西天開教をめざして、身延山より旅立つて行くことでしょう。

これこそ、まさしく、

日は東より出で　西へ入る

日本の仏法の月氏（インド）へ返るべき瑞相なりと仰せられた大聖人の、正法広布に対する具体的な予言を、実現せしむる國際的仏事と申されましよう。

既に日本山一門は、昭和五年の夏以来、身延山奥之院を起点として西天開教にさきがけています。まして日蓮宗門は、總本山身延山から既に釈尊像や法華經の送られる以上、西天開教の青年僧団を組織し、これを

本隊として身延山より陸続としてインド靈鷲山へ派遣して行かねばなりません。はや機運は熟し、時は迫つてゐるのです。

若し、この国際的布教が実施されるならば、釈尊が本仏として法華經を説法し、滅後舍利を留めたインドの靈鷲山と、日蓮大聖人が本化上行菩薩の再誕として法華經を宣布し、滅後真骨を留めた本朝の身延山とが文字通り法華經によつて結ばれ、両国両山一体の血脉の中に、ます亞細亞の仏法を開会し、光りは東方より起りて、世界の闇を照破して行くことでしよう。

この氣宇広大なる経縪は、單なる夢想ではありませ

ん、現に驚峰会においては、このため斃を異国の辺土にさらすほどの、不自惜身命の決意にもえた青年僧が持機しているのです。

勿論、日印両国を法華經で結ぶ仏事の基盤になつてゐるものは、仏舍利塔建立にあることは申すまでもないことです。



身延七面山に安置されているセイ
ロン伝来(左)とインド伝来(右)
の仏舍利宝筒

24

ところが、かかる仏舍利供養に対して、これを否定する人々が決して少くはないのです。釈尊脱仏を標榜

する創価学会ならまだしも、釈尊を本仏と仰ぐ日蓮宗内の、しかも有識者の中に、その声があるから奇怪といふほかないません。

今、仏舍利供養を否定する理由の主なるものを挙げ

れば、

てみることにいたしましよう。

(+) 法華經第十章の法師品の中に「また舍利を安する
ことをもちいす」と述べられている。

(+) 法華經こそ法身不滅の舍利であつて、それは生身
現滅の舍利よりも貴いものである。

(+) 日蓮大聖人は弘安元年八月十一日の弥源太入道御
消息に、

仏の舍利は、火に焼けず、水に濡れず、金剛の
鎌で打てどもくだだけず。ひとくだきして見よか
し。

と仰せられて、仏舍利に偽物が多いことをいまし
められているばかりでなく、四百余篇の御遺文中
をもちいす」とあるのは、第十一章の見宝塔品以前の
ものであるということよりも、大小乗兩教の塔觀論争
が、その激烈さのあまり、開会法門の法華經々典の中
にまで流入したものであり、むしろこのことによつて

(+) 久遠の本仏は滅度しないので、仏舍利などあろう
はずはない。

といったような条項が数えられているようです。

そこで、右の四項目について、いさゝか所見を述べ

法華經以前における塔觀論争の、如何に激烈にして執

拗をきわめたものであつたかと推量されると同時に、法華經々典の成立当時にあつてさえも、仏教徒の間には仏舍利供養の方が、なお隠然たる魅力を蘊藏していたことを物語るものであるということは、先月号にも述べた通りです。

要するに(一)と(二)は、仏滅後における大小乘間の塔觀論争の歴史も知らず、また此の論争を開会しようとした多宝塔の涌出、これにつぐ多宝塔中における二仏並座の起源をも知らざるものゝ稚言とも申されましよう

蓋し法師品の「また舍利を安ずることをもちいす」

ということは、法華經を供養するならば、あえて仏舍利を安置して供養する必要はないという意味であつて

仏舍利を供養してはならない、といふのではないのです。このことは文意上、注意しておかねばなりません

次に、(三)の弥源太入道御消息の一節ですが、これは

鎌倉建長寺の開山である中国僧の蘭溪道隆が、弘安元年七月二十四日、六十六才で他界した直後、道隆の門

人たちが口をそろえて、

「道隆禪師の遺体をダ毘にふすと、不思議にも屍骨が仏舍利となつた。さすがに師の道隆禪師は、既に生前から生き仏であつたのだ」

と鎌倉中に、盛んに吹聴していた流言を、さつそく

大聖人の門下が、身延山へ報告した時、

「如何に釋天魔とはいえ、死んだ後までも、死骨が仏舍利になつたと言ひふらすことは、釈尊に対しても潜上も甚しい妄言である」

という意味をこめて、強く此の流言を否定された大聖人のお言葉であつて、

「ひとくだきにして見よかし」

と仰せられたのは、釈尊の仏舍利に対した言葉ではなく、仏舍利と潜称する建長寺道隆の死骨に対する言葉なのです。

如何に真偽をたゞすとはいえ、教主教尊を本門の本尊と仰ぐ大聖人が、その仏舍利に対しても、

「試みに金剛の金鏡で、ひとくたきに打ちくだいてみよ」

と、仮りにも仰せられるはずはありません。自分の親かどうかを知るために、親という人の頭をぶんぐつて試みる馬鹿が何処におりましょ。大聖人ほどの方であるならば、仏舍利をおがんだけでも、その真偽のほどは判明するはずです。真偽不明の仏舍利のこどらともかくも、禪天魔の道隆の死骨と判つていながら、これを敢て仏舍利と潛称すればこそ大聖人は、「ひとくだきして見よかし」と揶揄されたのでした。

ところが、そうとは知らず、大聖人の此の言葉を、釈尊の仏舍利真偽鑑定に対するものと錯覚した人々がなお今日、仏舍利供養を否定する重大な典拠として、あたかも鬼の首でも取つたかのように、得意げにぶり廻しているのです。まことに笑止千万というほかはありません。

さりとて大聖人の四百余篇の御遺文中、仏舍利供養

を讃歎したお言葉はありません。それは、お題目が既に本仏釈尊の因行果徳の一法である以上、あえて入手至難な仏舍利を求めてまで供養する必要はなかつたということ、並に大聖人の一代六十一年の間に、仏舍利を得得する縁がなかつたということによるものです。若し、この縁があつたならば、伊豆流配中に感得された海中出現の立像釈尊一体を、久遠の本仏として終生奉持されていたように、感得の仏舍利を、本仏釈尊の仏舍利として、終生奉持されたことあります。次に、師の「久遠の本仏は滅度しないので、仏舍利などあらうはずはない」ということ。このことは重大な問題をはらんでいます。ということは、そのようなことを主張する人々は、
△久遠の本仏とは滅度しない法身や報身△
とのみ考へてゐるからです。確かに法身や報身は滅度しないのですから、その仏舍利はありえない、とい

然しながら、法報應の三身といえども、それは敢く
までも仏陀觀であつて、釈尊を離れて実在するもので
はなく、開目鉢に、

法身の無始無終は説けども

応身・報身の顯本は説かれず

と仰せられているように、大聖人が久遠の本仏と仰
がれたのは、生身の釈尊をはなれた本仏でもなく、ま
た生身の釈尊の奥に求めた本仏でもなく、實に靈山虛

空會上、本門八品の法華經を説かれている、その時点
における生身の釈尊そのものを、久遠実成の本仏とし
て仰がれたのですから、その生身の釈尊が滅度して仏
會利を留めるならば、留めた仏會利を通して、八品虛
空會上の生身の釈尊を、久遠の本仏として恋慕渴仰す
るという至情も、法華經教徒としては当然起きて来る
わけです。

このことに関しては、先きにも、

「釈尊を久遠の本仏として仰ぐ以上、その生身の會利

が、分散された碎身の會利でなく、嚴然未散なる全身
の會利であつて欲しかつたという心情が、そのまゝ多
宝如來の一身に投影し、その多宝如來と二仏並座する
ことによつて、それまで碎身の會利を通して生身の釈
尊を仰いでいた小乘佛教の在り方が、嚴然未散なる多
宝如來の會利身に即する釈尊を、久遠の本仏として仰
ぐよう開頭されて行つたのである」

と述べておいたのですが、既に釈尊が久遠の本仏で
あることが確定した以上、本仏釈尊を通して碎身の會
利も尊び、碎身の會利を通して本仏釈尊を恋慕渴仰す
るという心情もおのずから涌發し、こゝに、

衆 我が滅度を見て

広く會利を供養し

ことよく皆、恋慕をいだいて

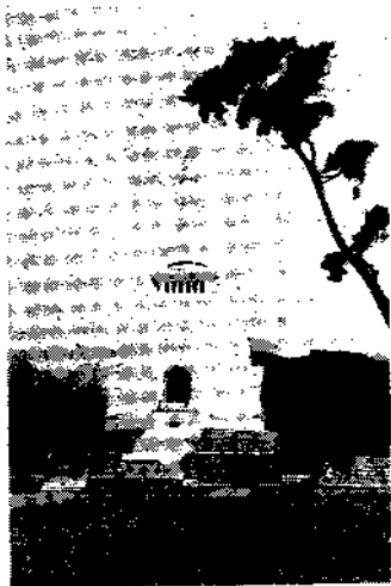
渴仰の心を生ず

という自我掲の一節が、切実なものとして測々胸に

迫つて来るものです。

勿論、この一節の主意は、仏舍利供養にあるのではなく、釈尊の滅度を見て、恋慕渴仰するということにあるものであつて、舍利供養は恋慕渴仰の媒介となつてゐるのです。そこで若し、如何に舍利を供養するとも恋慕渴仰の心がなければ、本末顛倒といわれねばなりません。

「こゝで、
一久遠の本仏たりとも滅度するのか」



という疑問も起りましようが、このことについては

既に自我偶の中に、釈尊みずから、

一、衆生を度せんがための故に

方便して不樂を現す

しかも実には滅度せず

常にこゝに住して法を説く

我れ常にこゝに住すれども

もうくの神通力をもつて

顛倒の衆生をして

近しといえども、しかも見ざらしむ

二、常にこゝにあつて滅せず

方便力をもつての故に

滅・不滅ありと現す

余國に衆生の

恭敬し信楽するものあれば

我れまた彼の中において

ために無上の法を説く

三、汝等これを聞かずして

たゞ我れ滅度すとおもえり

我れもろくの衆生を見れば

苦悔に没在せり

かるが故に、ために身を現ぜずして

それをして渴仰を生ぜしむ

その心、恋慕するによつて

即ち出て、ために法を説く

神通力かくの如し

と示されている通りであつて、本仏釈尊の滅・不滅

一、仏舍利そのものが本仏ではないこと。
二、仏舍利供養が法華經信仰の絶対的条件ではないと
いうこと。

三、法華經とお題目を法身の舍利と仰いでも、そのも

のが久遠の本仏ではないということ。

四、法華經にしてもお題目にして、八品虚空会上の

生身の本仏釈尊より流出した因行果徳の功德体で

あるということ。

然し、そのいすれにしても正しいものであつて、仏

舍利供養は法華經をもつてしなければならないことは
言うまでもなく、またいやしくも法華經を信奉する者
は、仏舍利に対し恭敬尊重讚歎の念を欠いてはなら
ないことも申すまでもないことです。

この場合、両者の優劣は論ぜられるべきものではな
く、むしろそれを論じようとする」と自体、却つて間
違つたことゝ申されましよう。

蓋し、こゝで注意しておかねばならないことは、

一、仏舍利そのものが本仏ではないこと。

二、仏舍利供養が法華經信仰の絶対的条件ではないと
いうこと。

三、法華經とお題目を法身の舍利と仰いでも、そのも

のが久遠の本仏ではないということ。

四、法華經にてもお題目にして、八品虚空会上の

生身の本仏釈尊より流出した因行果徳の功德体で

あるということ。

右、四点は、はき違えてならない重大なことゝ思う

のです。

思うに、いずれの国の如何なる人であつても、死者をともらわぬ者はありません。たとえ今が今まで戦争で殺しあつて、いつでも、戦争が終れば敵味方をとわず戦死者をともらははずです。まして自分の親が亡くなつた時、

「生前の親の精神に生きれば、それでよいのだ」

といつて、親の遺骸もほうむらず、お墓も建てず、供養もしないという者が何処におりましょ。このよ

うな卑近な一例をもつてしても、釈尊の仏舍利を供養すべきことは当然であります。況んや、

「教主釈尊こそ人類の主であり師であり親である」と強調してやまなかつた大聖人の門下としては、なおさらのことです。

法華經第二十三章の薬王菩薩本事品の中では、一切です。

衆生喜見菩薩（後の薬王菩薩）が日月淨明徳仏の滅後

その仏舍利を供養すべく、八万四千の大宝塔を建立したという過去世における仏舍利供養の故事が物語られ

ており、また未来世における仏舍利供養については、

第十二章の提婆達多品の中に、提婆達多が天王如来となり天王如来の滅後、その仏舍利をまつる七宝の宝塔が建てられ、これを礼拝供養する無量の衆生が、阿羅漢果を得、僻支仏を悟り、不退転の位に至るという、未來記が述べられています。法華經は三世に亘つて仏陀を慈慕渴仰し尊重讚歎すべきことを教えた教典なのです。

今日、日蓮門下の中に、本尊様式に固執するあまり仏舍利供養を否定する傾きがありますが、これは大きな僻見であり、教主釈尊を主師親の三徳兼備の仏陀として恋慕渴仰する心があるならば、生身の仏舍利に対する礼拝供養の念も、おのずから湧き起つて来るはず

いな、「衆見我滅度、廣供養舍利」という此の經文を、よく来るならば、その文底に、

「生身の釈尊へ帰れ」
「法華經本門八品虛空会上の、生身の本仏釈尊に帰一せよ」

という雄叫びが聞えて来るようです。

この雄叫びは、釈尊の精神を忘れて仏舍利と戒律に執着している小乘教徒に対する雄叫びであり、また釈尊を忘れ、釈尊を第二義的な存在に伏して、釈尊以外の三世十方の諸仏とその教法に執着している大乘教徒に対する雄叫びでもあります。

即ち法華經は、久遠実成の生身の釈尊を本仏として立てるによつて、これまで仏舍利と戒律とを媒介として間接的に生身の釈尊に帰一していた小乘教徒をして、直接、生身の釈尊に帰一せしめると共に、

「その釈尊も、靈山虛空会上、本門八品説時を時点とする釈尊である」

と限定することによって、本門の大法を全面的に打ち出し、これによつて、これまで釈尊を忘れ、或は釈尊を第二義的にみなして来た諸天乘教の教法主義を開会し更に諸仏依本より釈尊依本へ復帰せしむべく、敢て「衆見我滅度、廣供養舍利」と呼びかけたのでした

蓋し、この呼びかけは、決して仏舍利供養を媒介として間接的に本仏釈尊へ帰一せしめようとするものではなく、あくまで直接本仏釈尊への帰一をうながすものであり、今日、日本山の仏舍利塔が南方諸国そのれと異つて、パゴダの側面に釈尊像が安置されていることによつても明かであります。

即ち、こゝでは最早、仏舍利塔はそのまゝ仏像塔となり、大乗と小乗の塔觀論角は止揚され、仏舍利への帰一は、そのまま本仏釈尊への帰一となつてゐるので

信仰相談室

あやまれる創価学会の

折伏と戒壇について

解説 日高白象

おたずね

創価学会の折伏と称する暴力的
布教……学会に入会しなければ罰
が当るといった強迫的な入信勧誘

の風潮は、

「うどまれる学会から、愛される
学会へ」

という戦術変更のためか、或は
学会にとつて天日山ともみなされ
ている衆議院選挙に備える一時的

な対策のためか、最近とみに姿を
消してソフトムードをかもし始め
ていますが、然し学会自体、

「何時かは国会の主権を獲得し、
政治力をもつて日本国中を学会一
色にぬりつぶし、富士大石寺に國

立戒壇を建立してみせる」と豪語している以上、このソフトムードに無気味なものが感ぜられるのは、私一人ではないと思いません。

それにしても、果して学会が豪語するように、国会の主権が学会に獲得され、日本国民はすべて嫌でも政治力で学会に入会させられ大石寺に国立戒壇が建立されるという事態が来るのでしょうか。

また学会勢力を今日まで拡大した彼等の、折伏と称する布教手段は、もとより誤つたものであることは申すまでもありませんが、日蓮大聖人のとられた折伏布教の真意とは如何なるものでしようか。

学会の折伏と対比してお示し下さい。

おこたえ

学会における最近のソフトムードは自主的なものでなく、これまでの折伏と称する強迫的布教手段が、社会の批難に堪えられなくて、そうせざるを得なくなつたむきもあります。勿論これは偽装です。

曾つて学会の池田会長が、「邪教（学会以外の宗教）は悉く撲滅する」と豪語して折伏行進を推進し、学会をあげて、学会による学会のための王仏冥合（政権の獲得、国

立戒壇の建立）を野望している以上、彼等の折伏手段は決して消えて無くなつたものではなく、むしろ「狼の赤ズキン」のようにソフトムードの偽装の中で、より鋭い牙をみがいていると申せましよう

去る正月二十二日、今年最初の身延山街頭布教が長野県の北信地方一帯に展開され、小諸市街の赤坂という四辻で、私が街頭説法を行つていた時、待機していた学会の青年行動隊三十数名の者が、狼の如く一拳に襲いかかり、やにわに私一人を二重三重に取り囮んで

マイクの奪取はまぬがれました
が、丁度、選挙期間中のことであり、小諸市では公明党より二人の市会議員が立候補していたのですから、学会としては街頭で学会批判がされることを極度に恐れていたわけです。彼等は、

「学会批判は選挙違反だ。その筋に訴えるぞ」

と口々に怒鳴りました。

「選挙違反とは聞きずてならぬ。

学会の池田会長自身、公明党と創価学会は違う、と断言しているはずだ。選挙中に公明党を批判したのなら兎も角も、学会批判では選挙違反になりようもあるまい。訴えるなら訴えてみよ。世間の笑い

草になるのは小諸の学会だ。それ

とも池田会長が、創価学会は公明

党と同じ政治団体であるとでも天下に公表したのか」

と反論するや、彼等は反答にも窮してしまい、身延山布教隊は更

に堂々の撃散行進を起して行つた

のですが、この一例によつても判るようだに、最近の学会は、手段のためソフトムードをよそいながらも、ことあれば何時ものように

集団の力をかりて、何かと因縁をつけては強迫的態度に出でているの

です。

彼等の称する折伏といふものは排他専横の手段以外に何ものでもありません。そしてそれは王仏真

合への段階として決して無くなる

ものではないのです。

何故ならば彼等の目的とする王

仏冥合、即ち主権の獲得、国立戒

垣の建立ということ自体が、既に

他の一切の宗教の存在すら許さない、学会による学会のための学会

のみのもの、という極端に排他的な独善専横の内容であるからです。

学会の目的が、こうしたもので

ある以上、学会のすべての行動には、油断は禁物です。

最近のソフトムードのために、

日蓮宗をはじめ他の宗教団体も、

学会批判の手をゆるめているよう

ですが、これこそ学会の思惑で

あり、この間、学会はこれまで受

けて来た社会批判の目をそらしな

がら、急速に膨張した内部の充実

を計ると共に、主権獲得への歩を

着々と固めているのです。

大石寺の正本堂建立の財源とし

て集めた三百五十億円を、新たな原動力として、公明党的拡充、

学生全員十五万の獲得、二十種にして正本堂の建設をはじめとして

東京都下の八王子市における創価大学の建設、同じく都下小平市に

おける創価高校、及び付属中学・

小学校・幼稚園の建設という、学

会のエリート育成一貫作業が着手されようとしているのが、その一

例です。

こうした学会の動向は、沈退し

石寺に建立しようとしているに至

「念仏無間、禪天魔、真言亡國、
律國賊」

た宗教団体にとつては、おそらく
驚異的ではありましようが、然し

つては、本末顛倒も甚しいこと、
申せましよう。

学会の思想が、果して日本国民の
過半数にまでも浸透することが出
来るか、どうか、ということにな
れば、学会自体の排他的な独善専
横思想を、みずから是正しない限
り、殆ど不可能に近い、と断言さ
れましよう。

然し、こゝに注意しなければな
らないことは、そう言い切れるの
は、敢くまで学会に対する敵し
い批判を、加え続けるという条件
の上でのことなのです。

若し、最近のソフトムードにひ

つかうつて、学会批判の手をゆる
めざならば、それだけ学会の拡充

され行くことは、火を見るより
明かであります。

従つて、国会における主権の獲
得も、国立戒壇の建立も、学会の
みの夢想であり妄想にすぎない、
と断言出来るわけです。

ところで日蓮大聖人の態度は、
まして国民の総意にもよらず、
学会のそれとは根本的に違つたも
のであり、たとえば折伏にしても
決して排他的なものでなく、

富士山麓の学会の總本山である大

「法華經の自我偈の經文をみまし
ても、その全文は、久遠の本仏釈
尊と、顛倒の衆生との關係を明か
にしたもののです。
顛倒の衆生とは、本仏釈尊を知
らない者のことであり、その中に
敢て本仏釈尊を信じようとはせず
却つて誹謗する者があるならば、

それを放置せず、その固執すると

ころの頑迷なる精神的よりどころ

を破折し、本仏教尊によらしめて

それ／＼、眞実の在り方に蘇生せしめねばなりません。それが大慈悲なのです。

然し、如何に破折するとはいえマホメット教のコーランの如く、他の宗教を排斥したり抹殺するものではありません。

法華經は万教帰一の聖典であるといわれているように、万教の存在を認めつゝ、本仏教尊を中心と

すべし」

という教令の示されている所以

が、こゝにあるのです。

従つて、大聖人の至急された本門の戒壇にしても、万教を排斥し

たり抹殺した戒壇ではなく、本仏

教尊を中心として、その精神のもとに、万教の存在を認めながら帰一調和せしめた戒壇であると申せましよう。

じて法華經教徒でもなければ日蓮門下でもないのです。

大聖人は開目鈔に、

「智者に、我が義、破られずば、

用いじ」

と仰せられていますが、学会は

その教義が正しかろうが邪しまであろうが問題ではなく、兎も角も王仏冥合という名のもとに、宗教によつて日本本土の征禦を野望し

目的のためには手段を選ばず、法律にふれるスレスレのことまでやつて平然としているのです。こゝでは最早、法華經も大聖人も彼等にとつては、彼等の野望達成のために手段にしかすぎなくなつてゐるのです。

立正安國と王仏冥合 ▲第四回▽

本門の戒壇と戒壇本尊

日 高 白 象



8

日蓮門下の中では、立正安國と王仏冥合とが、よく混同され勝ちですが、これは全く異質のものであつてその相違は明確にしておかねばなりません。

申すまでもなく立正安國というのは、國を安ずるために正法を立てるという、國主法徒の立場にあるものではなく、あくまでも正法を立てた結果、その功德として國が安じてゐる、という法主國徒の立場にあるも



のです。

このことは個人的信仰においても同様であつて、罪障消滅のため、或は成仏のために、法華経を信仰するのではなく、法華經を信じ、その菩薩道を実践した結果、その功德として無始の罪障も消滅し、無上菩提も成ることが出来るのです。このことは信仰の立て方として、非常に重要なことですから、よくよく注意しておかねばなりません。何故ならば、滅罪滅仏という目的のために、法華經を手段とし勝ちであるからです

立正安國の場合でも、若し安國のための立正であるならば、その宗教は國家の御用宗教と何ら變らないものと望してしまうでしょう。宗門七百年の歴史をひもといてみても、国家政策のため、宗教の本質がゆがめられた例は枚挙にいといません。そしてこれに抵抗したもの、決して少くはないのです。

一方、王仏冥合ということは、仏法と王法とが、た

とえば鳥の兩翼、車の両輪のように、互に相關相資、相互扶助しあつて宗教と國家と共に繁栄せしめるというのです。これは如何にも聞えがよいものゝようですが、然しこれとて所詮、宗教と政治の野合・結託にすぎません。

戦後の新興宗教を例にとつてみても、教団は組織のために政治家を政界へ送り込み、政治家もまた教団の組織を利用して票を集めしており、甚しきに至つては、教団がそのまま政治団体と化した存在さえあるのです。彼等は口をそろえて祭政一致、王仏冥合を標榜していますが、然し、それは畢竟、政治と宗教の野合・結託を美化する佞言でしかないのです。

日蓮大聖人の行き方は、断じて國主法徒にあつたのでもなく、また王仏冥合にあつたのでもなく、むしろこれを破折するところの、徹底した法主國徒の、立正安國にあつたことは申すまでもありません。

ところが日蓮門下の中には、以上の如き國主法徒を

主張するものや、特に王仏冥合を標榜するものが現われて来ており、しかもそのいずれにしても「本門の戒壇」を建立するということが目標とされています。或はそれは戒壇建立を目的とするために、その方法論として、このような思想が派生したとも申されましよう

もとく大聖人みずから「本門の本尊」「本門の題目」「本門の戒壇」という三大秘法を開宣され、一天四海皆帰妙法を悲願されて、國家諫曉は三度にも及んでいながら、四百余篇の御遺文中、本尊と題目の説明は尽されていても、戒壇については殆ど説明されていないところから、戒壇の建立、その方法論ということが、門下にとつて重大な問題となつて来たのも、蓋し当然なことではあります。

9

「本門の戒壇」については、宗門古来「理の戒壇」と「事の戒壇」ということが考えられ、「理の戒壇」とは即是道場の戒壇のことであり、「事の戒壇」とは國家統一・世界統一の戒壇のことであると解釈されてきました。勿論、問題となるのは後者の統一戒壇のことはかなりません。

今日、創価学会が日蓮正宗の縁本山である富士大石寺に、巨万の資金を投じて、國家統一・世界統一の戒壇を建立しようと猛運動を展開しています。これに対する反動ではないでしようが、日蓮宗門の中には、「本門の本尊を安置して、本門の題目を受持するところは、悉く本門の戒壇である。奈良朝時代の日本三大戒壇の弊害を熟知されていた大聖人が、ことさらに統一戒壇を志されるはずはない」

という意見も述べられています。

なるほど本門の本尊を安置し、これに向つて本門の題目を受持するところは、たとえ寺院・教会であれ個人の家庭であれ、或は園中においても林中においても或は樹下においても山谷曠野においても、みな悉く事

相の戒壇であり、本門の戒壇にはかなりません。

従つて、即是道場を理壇とし、統一戒壇のみを事壇とみなす解釈は、大いなる僻見とも申されましよう。むしろ本門の戒壇とは悉く事壇であり、事壇に即是の戒壇と統一戒壇の二類があると言わるべきです。

然しながら、宗門の一部に言われているように、果して大聖人には統一戒壇という思想はなかつたのでしようか。

今、四百余篇の御遺文中、三大秘法を並べて論ぜられており御道文を掲げれば、

法華經行者值難事（真蹟中山聖教殿）

龍樹・天親は共に干部の論師なり。但し権大乘をのべて法華經をば、心に存じて口には吐きたまわす。天台・伝教は之をのべて、本門の本尊と四苦薩と戒壇と南無妙法蓮華經の五字とは之を残したもう。所詮、一には仏授与し給わざるが故に、二には詩機未熟の故なり。

法華取要鈔（真蹟中山聖教殿）

問うて云く、如來滅後二千余年に、龍樹・天親・天台・伝教の残し給える秘法とは何物ぞや。答えて曰く、本門の本尊と戒壇と題目の五字なり。

教行証御書

そもそも、當世の人々、いずれの宗々にか本門の本尊・戒壇等を弘通せる。仏滅後二千二百二十余年に一人も候わず。

報恩鈔

一には日本乃至一闇浮提一同に本門の教主釈尊を本尊とすべし。所謂、宝塔の中の釈迦・多宝、外の諸仏ならびに上行等の四菩薩脇士となるべし。二には本門の戒壇、三には日本・乃至漢土・月氏・一闇浮提に人ごとに有智無智を嫌わず、一同に他事を捨て、南無妙法蓮華經と唱うべし。

三大秘法鈔

身量品の本尊と戒壇と題目の五字なり。

以上の如く戒壇に關しては、ただ名稱を打出したのみであつて、その説明は四百余篇の御遺文中、たゞ一大秘法録の次の二ヶ所にしか述べられているにすぎないのです。即ちそれは、

戒壇とは王法仏法に冥し、仏法王法に合して、王

臣一同に本門の三秘密の法を持ちて、有徳王・覺徳比丘のそのむかしを、末法濁惡の未来に移さん時、勅宣ならびに御教書を申し下して、靈山に似たらん最勝の地を尋ねて、戒壇を建立すべきものか。時を待つべきのみ。事の戒法と申すは是れなり。三国ならびに一閻浮提の人、懺悔滅罪の戒法のみならず、大梵天王・帝釋等も來下して踏み給うべき戒壇なり。

蓋し、この一節こそ、王仏冥合によつて國立戒壇を建立し、ひいては亞細亞全域から全世界の思想・宗教まで統一しようとする重要な典撲となり、且つは唯一の極め手ともなつてゐるものです。

然し、三大祕法録には古来、大聖人の眞顕かどうかという真偽批判がまびすしく、今日なお論争がつけられている状態であつて、これを後世の偽作とみなす人々の中には、

「大聖人には統一戒壇という思想はありえない」

と断定し、

「むしろ即是道場の戒壇が、隨時隨所に建立され、その數が世界全域に及ぶことをもつて広宣流布・通一仏土となすのが、大聖人の正意であつたとみなすべきである」

といつたような主張の起つて来るのも、蓋し無理からぬことではあります。然し果して、そうなのでしょうか。即是道場の戒壇建立という個々の立場と同時に、全体的な立場から國家戒壇・世界戒壇の建立ということが、至念されてはいなかつたのでしょうか。何故ならば「個と全」という關係は不可分なものであり、個あつての全、全あつての個であり、全體の幸



天平年間、鑒真和尚が奈良の唐招提寺に築いた石造の戒壇。

これをおいつていた堂宇は落雷のため焼失している。

いなくして個の幸いはありえないものであり、大聖人は特にそのことを至念されておられたからです。

ここで戒壇本来の意義と、その歴史をふりかえつてみましょう。

10

「戒壇とは、本門の本尊を安置して、本門の題目を受持する戒場」

と解釈されていますが、これによれば日蓮門下の寺院・教会にしても、一般家庭にしても、その中に戒壇があるわけです。

然し、本来戒壇とは、授戒の戒場のことであつて、地上高く三層の壇を築き、この戒場における授戒によつて、はじめて僧侶たること、仏教徒たることが認められたものなのです。

まず印度においては、祇園精舎の外院の東南に三層の戒壇があつたと伝えられており、善見律毘婆沙論では、戒場の極小なものでも二十人の収容が可能であつた、と記されています。

中國では南宋の文帝の代、元嘉年間、求那跋摩が南

林寺に戒壇を築いて、僧尼に授戒したことより始まるといわれ、唐の道宣律師の戒壇圖經によれば、東晉の法汰、晉の支道林、支法存はじめ三の道生、宋の智嚴、慧觀、梁の法超、僧祐等がそれなく壇を築き、江准の間に三百余所の戒壇があつたと伝えられています。また道宣自身、はじめ淨業寺に石の戒壇を築き、老年に至つて、これが律にあわざと気付いて、みずから土を運び、律に準じて改築したともいわれています。

勿論、以上は小乘の戒壇ですが、大乘戒壇は代宗の永泰元年、大興善寺に方等戒壇が築かれたことに始まり、その後、唐宋の時代に数十ヶ所の築壇があつた、と伝えられています。

我が国においては大和の東大寺の戒壇、下野の薬師寺の戒壇、筑前の觀世音寺の戒壇が、勅許による日本三大戒壇といわれ、東大寺の戒壇は天平勝宝六年、鑒真（がんじん）和尚が唐より米朝し、聖武天皇の勅許によつて翌七年に完成した三層の土壇であつて、上層

の四方には、現在國宝として有名な東の持國天、西の廣目天、南の增長天、北の毘沙門天という四大天王が陣取つており、その中央には釈迦・多宝の二仏並座した多宝塔が、本尊として安置されています。

この釈迦・多宝の二仏は享保年間、木造で造り直されていますが、現在の祭り方は、釈迦・多宝の位置を入れ替つていて、説明書にも、わざく図解してまで釈尊が右、多宝如来が左と示されており、東大寺では法華經虛空會の儀相の中心部までも間違えているのかと歎かわしくなりますが、それは兎も角、鑑真和尚が中國より奉持して来た釈迦・多宝の二仏は、共に金銅仏であつたといわれています。

もとより、東大寺の戒壇は小乘戒壇なのですが、小乗戒を授けるのに法華經の二仏並座した釈迦・多宝を本尊としたのは、一体どういうわけなのでしよう。納得しかねるところです。こゝに、

「鑑真和尚が十二年間、五度の渡海を試み、両眼は潮

風につぶれてまでも來朝したのは、法華經による大乘戒を日本へ伝えんがためであつた。然し來朝してみれば、奈良朝の日本仏教は、あまりにも腐敗し堕落していた、そこでやむなく釈迦・多宝の二仏を本尊としながらも、不本意にも小乘戒を授けざるを得なかつたのであろう」

という憶測も起きて来るわけです。然し、いずれにしても小乘戒坦であつたことは事実であり、東大寺は中國地方諸国の授戒道場であつたのでした。

また下野の薬師寺と、筑前の觀世音寺は、淳仁天皇の大平宝字六年に建立されたものであり。薬師寺は東海道の足柄峠と東山道の信濃峠の以東諸国の授戒道場觀世音寺は西海諸国の授戒道場として勅許されたものであつたのです。

なお以上的小乘三戒坦に対し、大乘円頓戒坦が伝教大師の悲願として、大闡の滅後まもなく天長四年五月二日、天台二代座主の義真の代、淳和天皇の勅許に

よつて比叡山延暦寺に建立されています。この戒坦本尊は文殊・弥勒を脇土とする坐像の釈尊でした。

大聖人は、この大乘円頓戒坦の建立を悲願された伝教大師の言葉として、報恩鈔の下巻に、

「西國の觀音寺の戒坦、東國下野の小野寺の戒坦、中國大和東大寺の戒坦は、同じく小乘臭糞の戒なり。瓦石の如し。それを持つて法師等は野千猿猴等の如し」と述べなれていますが、戒坦の優劣勝敗はともかくとして、戒坦本来の意義は、公認された一定地域における授戒道場であるということが、その歴史によつても明かとされましよう。

なお大聖人は、報恩鈔の右の言葉について、「觀音寺の大乘戒坦、すでに立てさせ給いぬ。されば証は同じけれども、法の流布は迦葉、阿難よりも馬鳴龍樹等は勝れ、馬鳴等よりも天台は勝れ、天台よりも傳教は超えさせ給いたり」と仰せられています。こゝに小乘戒坦より大乘戒坦

伝教の戒壇にも勝れた法華經本門の戒壇を建立されんとした大聖人の密意を押することが出来るのではない

でしようか。

観心本尊銘に、

「正像二千年の間は、小乗の釈尊は迦葉・阿難を脇土となし、権大乗ならびに釈迦・法華經の迦葉等の釈尊は、文殊・普賢等を以つて脇土となす。これらの仏を正像に造り画けども、いまだ寿量の仏ましまさず。末法に来入して始めて此の仏像出現せしむべきか」

と仰せられ、更に、

「此の時、地涌千界出現して、本門の釈尊の脇土とな

り、一國浮提第一の本尊この國に立つべし」

と教令されていることこそ、実に仏滅後二千二百二十余年が間、未曾有ともいわるべき、地涌千界の上首上行、無邊行、淨行、安立行という四大菩薩を脇土とする、法華經戒壇の教主、久遠実成の本師釈迦牟尼仏の、仏像をもつて「本門の戒壇本尊」とされたもので

ある、と押することが出来ましよう。

「戒壇とは本門の本尊に向つて、本門の題目を受持する戒場」

というような抽象的な解釈に留まらず、これと同時に、三国伝来の三層の築壇とみなす時、前述の本尊銘の意趣が生々として来るのです。

大聖人は建長五年の開宗に先きだつて奈良の東大寺に戒壇を見学されたことでしょうが、あの戒壇第三層の仏像が、一尊四士本尊様式として勧請されるならばそのまま本門の事の戒壇として彷彿されることでありますよう。

現在、日蓮門下の各宗・各派・各教団にあつては紙墨の大マンダラか、それを偶像化した仏像群が、本尊様式として勧請されることがならわしとされていますが、然し三層の授戒戒壇の本尊様式としては、ふさわしいものではありません。こゝに一尊四士本尊様式による「此の仏像出現せしむべきか」と、仰せられた大

聖人の密意を押することが出来るのです。

とでしょう。

といつて大マンダラ様式が一尊四士様式に劣るというのではありません。共に本尊として内容に変りはないのです。問題は大聖人自身に統一戒壇建立の意志があつたかどうかということであり、その意志が深く秘められていた証左として、仏像による一尊四士本尊様式が強調されるのです。

なお余談ではあります。

「棄恩入無為、真実報恩者」

という信念にもとづく出家の儀式、いわゆる得度式なるものは、出家の道を歩む者にとって、生涯を一変する最も大切な儀式でありながら、宗門全体に亘つて殆どなおざりにされているか、無視されている状態でした。これでは如何に人材養成を鼓吹しても、出家道をつらぬく僧侶を輩出することは至難であり、却つて製造、衣をまとい、家庭大事に、仏法を売り物にし、食い物にする滅世僧侶が続出するのも、無理からぬこ

道元禪師は中国に渡つて修行中、嚴肅なる得度式に臨席し、袈裟頂戴の儀式の尊さに感泣した、と報告しているほどですが、それほど得度式というものは意義深い嚴肅なものなのです。

そこで日蓮宗門においても、かゝる弊風を刷新是正すべく、昨年来、大聖人が出家得度した聖地である千葉県清澄山において、度牒伝達式が行われるようになりました。得度した徒弟は、師僧とともにわざで全国から清澄山に集まり、得度の認証をうけるわけです。

まことに結構な試みではありますが、せつかくそこまでやるならば、更に歩を一步すゝめて、清澄山頂、「宗立戒壇」として三層の授戒の戒壇を築き、戒壇本尊を安置して、古式にのつとる厳肅なる出家の儀式を行はべきであろうと思うのですが、如何でしょうか。

次号は三大秘法録の戒壇内容を再検討し、あわせて大聖人の転輪聖王思想をふりかえつて本稿の結びにしたいと思います。

日蓮大聖人の御尊像の頌布

推 薦 の 言 葉

東身延鎌倉本覚寺住職 貝 山 日 泰

信仰の対象として朝夕必ず礼拝する日蓮大聖人の御尊像とすれば、吾々の思慕の情と純真尊崇の宗教心を満足させる立派な芸術作品に越したことはありません。私は常に内仏として親しめる小形の祖像を欲求していましたが、はからずも齊田秀晃先生の力作になる祖像を見て「これなら拝める」と感じ入ったのです。然し木彫ともなると、どう簡単に手に入れるとは出来ません。そこで若し、これを原型として鋳物にしたらどうかと考えつき、先生にお願いして、ようやく出来上つたのが此の祖像です。

尊像 座像 高さ十三センチ

重さ 一・四キロ

作者 日本彫塑会々員、神奈川県展委員、鎌倉美術家クラブ委員、齊田秀晃先生

頌布価 三百枚限定、一枚三万円

これは池上の国宝の木像や、宗内広く知られている水鏡の肖像を基として、大聖人の尊顔を偲び、更に芸

術家のセンスと夢を取り入れて、円満相好の尊像を作り上げたもので、信仰の立場より拝んだ感じは、実に厳にして而も、内に慈悲柔和を含む温顔そのものゝ御姿で、本当に拝める祖像です。木彫のタッチや美しい線をそのまま生かし、芸術品としても高く評価されるに充分なりと信じます。原型は本化門下の厚き信仰より生れた結晶であり、鋳物師は国宝類の修復を手がけた伊藤氏であり、外箱の作者も一流の指物師であります。

どの点から見ても確信を以つて推奨出来る御尊像といえます。

峰鷺誌代通算のお通知

三種郵便物になれば

本誌は昨年まで毎々合併号を出したり欠刊したりして、大へん御迷惑をかけましたこと心より詫び申上ます。かえりみれば本誌は昭和三十九年は送料本会負担一冊五十円で十二回発行、四十年は送料共六十円で七回発行、四十一年は八月号より送料二十五円となつて六回発行、本年は合併や欠刊のないよう全力を傾注していますが、これまで合併・欠刊した誌代の分は先きへ繰り越し、途中値上げなつた誌代、送料共に通算しております。

本年既に誌代御納入の方へは、これにもとづいて領取書を差上げていますが、未納の方へは通算の結果をお通知申上げますので、それによつて御納入のほどお願い申上げます。なお一層の御理解ある御支援をたまわりますように。

恐々

本誌は創刊以来四ヶ年を経ましたが、この間、本誌は合併号や欠刊したゝめ三種郵便物としての認可がとれず、不定期刊行物として送料十円を要し、昨年の夏より郵政省の方針によつて送料二十円となりました。

誠に大きな負担ですから、三月号発行と共に三種郵便物取扱認可を申請します。若しこれが認められるれば絶対に合併欠刊は許されません。そこで発行資金の円滑のため万策を講じますが、読者皆様へも誌代切れと同時に、その旨をお通知申上げますので御協力下さいますよう。

また三種が認められすれば送料は六円となりますので、現行七十五円の誌代はそのままにすえおき、現行三十二頁立てより更に頁数をふやして内容の充実を計り、増頁の分は信仰体験談など一般の人々に解りやすいものとし、難しい教學は今まで程度で留める所存です。よろしくお願ひ申上ます。

第五回法華經講鑽の集い御案内

昭和四十二年度

賛助会費志納者御芳名

鷺峰賛助会員とは本誌の発行、人材養成、布教活動という鷺峰会の青年運動に対し、精神的経済的両面より参加して毎年三千円を志納される方です。鷺峰会の維持発展のため、賛助会員の貢献するところ誠に甚大なるものがあります。こゝに本年正月より二月十五日までに昭和四十二年度の賛助会費御志納者の御芳名をかゝげ感謝の意を表します。

東京都	中原 勝	大阪市	西川友義
"	有賀義雄	"	宮本龍一
"	中山はま	"	赤阪日孝
京都府	大塚淑恵	横浜市	中盛直保
北海道	浅見行光	岐阜県	花房 毅
広島市	本間妙海	名古屋市	鈴木海仙
四日市市	内田淳子	福岡県	古賀みゆき
伊藤 清			

講師 転輪聖王と本門の戒壇
講題 日高白象先生
日時 三月四日（第一土曜）午後六時三十分より
午後九時三十分まで
会場 横浜市南区片土ヶ谷中町一六一
大乗物産株式会社（社長・猪瀬秀成氏）
本社二階、電話一横浜（七四）〇九四二
参加 誰でも自由、全費不要

昨年十一月より毎月一回開講された「久遠のいのち——その時と人と教と国——」と題するシリーズは、三月をもつて一往終了します。なおこの間の講義内容は本誌へ掲載する予定です。

編集後記

鷺峰三月号

昭和四十二年通卷第三十四号

第五卷第三十四号

定価五十円 送料二十五円

昭和四十二年三月五日 印刷

昭和四十二年三月十日 発行

編集兼発行人

山梨県身延町波木井三区醒悟園本妙庵

日高白象

印刷所

山梨県身延町梅平

藤田印刷所

發行事務所
山梨県身延町波木井三区四一二五

鷺峰会

電話(身延山)四五九番
振替(甲府)二〇九三番

賛助会費	代	半 年 分	四 五〇 円	(送料共)
一年分		九〇〇円	(送料共)	(分納可)
三〇〇〇円				

★三月号は自我闡講義にしても信仰相談室にしても、そして立正安國と王仏冥合にしても、一貫したテーマとなり、信仰体験談は紙幅の都合上、割愛をよぎなくされてしましました★蓋し、右の中、特に「本門の戒壇の事相」と「戒壇本尊」ということは、これまで日蓮門の下では、あまり取りあげられたこともない問題だけに、読者の中より所見が殺到するのではないか、と予想されます★周囲の批判をはゞかつて所信を発表しなければ、何時になつても発表の機会はなく、遂に未発表のまゝ一生を終つてしまわねばなりません。

★難多く、しかも難の続出することを悟り、背水の陣を引いて、臆せず所信に邁進し、十方の批判を感謝しながら、大聖人の宗教を現代に活現することに役立つならば、これにすぎる幸いはありません★公明黨の衆議院進出は二十五席に留まりました。更に創価学会破折の法陣を進めねばなりません。二月中旬より下旬にかけて九州福岡県の街頭布教です。

△白▽